

●開催しました

# 荒川修作+マドリン・ギンズ ~ARCHITECTURE AGAINST DEATH~ 『宿命反転都市』考

会 期 2004年10月30日(土)→11月20日(土)

12:00→18:00 日曜休館 入場無料

会 場 名古屋芸術大学アート&デザインセンター

●オープニングトーク 10月30日(土) 15:00~ B棟大講義室  
対談 荒川修作 & 馬場駿吉 (俳人・美術評論家)

アート&デザインセンター秋の企画展は、荒川修作+マドリン・ギンズによる「宿命反転都市」の構想の全貌を、その展開に大きな転機をなした「養老天命反転地」とともに紹介するものでした。本展は、本学美術文化学科3年生が中心となって展覧会の運営を担当し、「養老天命反転地10日間生活する」といった等身大のレポートをはじめ、学生が何と“アラカフを理解しよう”と、それぞれのアプローチも関連展示として発表されました。

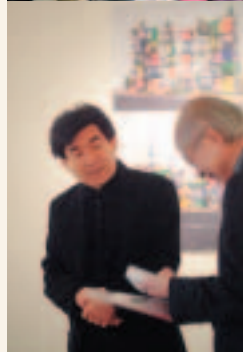
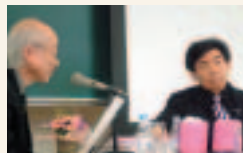
10月30日(土)の開会には、荒川修作氏も来場され、馬場駿吉氏(俳人・美術評論家)との対談、続いてパーティーが催されました。馬場氏の深い理解と、荒川氏の気迫に満ちた分かりやすい提言、満員の会場には充実した時間が流れました。

2005年には三鷹市に住宅が完成し、名古屋市には荒川+ギンズの構想を取り入れた「志段味循環型モデル住宅」が公開されます。今後に挑まれる遠大な企図と構想。

本展会場に記された荒川氏のサインは、若者をはじめ多くの人々を惹き付けました。“死なないために!!”



三鷹天命反転住宅 2002-2004



荒川修作氏と馬場駿吉氏

●次回予告

# POLLEN —美しき旅行史—

会 期 2004年12月4日(土)→12月15日(水)

12:00→18:00 日曜休館 入場無料

会 場 名古屋芸術大学アート&デザインセンター

●オープニングパーティ 12月4日(土) 16:30~18:00

本展「POLLEN—美しき旅行史—」は、多様な表現方法を持つ各作家の生き方にスポットを当て、作品を紹介します。

ギャラリーBE、beとロビーでは教員・OB・学生による作品を展示し、スタジオでは、OBでもある若手の気鋭作家「鬼頭健吾+秋吉風人」2人展を行います。

また、エントランスには仮設のショウウィンドウ型ブース「singing flower point」を設置し、3・4年生によるパフォーマンスを行います。このブースでは会期中限定の放送局も設置し、放送も行います。

企画：「仮設」—構想領域研究室

構想領域研究室とは大学院、同時代表現研究室に存在する架空の研究室です。企画を構想する度に国内外で大小さまざまな活動を行っています。



## Steering committee MEMBER

### H16年度 アート&デザインセンター 運営委員会メンバー

- センター長 神戸 峰男
- 委員長 高橋 綾子
- 副委員長 藤松 由美
- 委員 岩井 義尚
- 須田 哲司
- 須田 真弘
- 池側 隆之

A&Dセンター 江坂恵里子

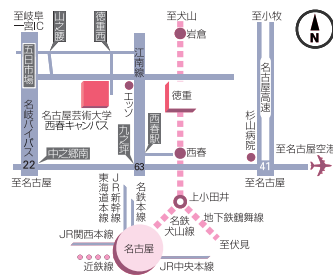
○編集後記

80年代、食糧ビルにできた佐賀町エキジビットスペースを初めて訪れた時、完成されたホワイトキューブとは違った空間自体の持つパワーを感じました。惜しまれながらもスペースの活動は終了しましたが、私たちに新たな視点を提示してくれました。アート&デザインセンターも学内の洋面棟アトリエだった建物をリノベーションしたスペースです。建物の持つ歴史とともに、新たな活動・発信の場になっていきたいものです。

(江坂)

Ble Vol.7  
発行日 2004年11月22日  
編集・発行 名古屋芸術大学アート&デザインセンター  
〒481-8535 愛知県西春日井郡西春日町  
Tel. 0568-24-0325 Fax. 0568-24-0326  
E-mail aadc@nua.ac.jp  
URL http://www.nua.ac.jp  
デザイン 岩田知人(サンメッセ株式会社)  
印刷 サンメッセ株式会社

2004 Printed in Japan  
© Nagoya University of Arts, Art & Design Center



交通のご利用  
●最寄りの交通機関をご利用の場合名鉄大丸線(地下鉄鶴舞線乗り入れ)徳重駅下車西へ約1,000m徒歩15分。  
●急行電車の場合は西春日井駅で普通電車に乗り換えるか下車してください。西春日井駅から北西2,200m徒歩25分。  
●西春日井からはタクシーの便もあります。  
●自動車ご利用の場合  
一環インターから10分、名神小牧インターから15分、名古屋空港から10分



特集  
Planes for Art

Rethink アートのちから

## renovation 東京2004

カルロ・スカルバという魅力的な建築家があった。彼の建築は、イタリアヴェローナのカステルベッキオに代表されるように、古い建物のリノベーションが多い。対象となる建築を過去、現在、未来の視点から読み解き、元の建築への真摯な尊敬の眼差しを失わずに、新たな空間をつくるものであった。それは、修復ではなく、彼が新たに設計した建築でさえ、彼の手にかかると、あたかもずっと前からそこにあったような空間になっていた。日本ではかなり状況が異なるものの、建物のリノベーションが話題になっている。15年程前、大手不動産会社が新聞1面を使って、築30年を経て廃屋同然になっていた住宅を、全く新しくするのではなく、手を入れたことがわからないように「直した」ことを紹介していた。建築や風景が時代を超えて連続することに価値があることを、伝えたこの広告は、バブル経済の終わりを表していたのかもしれない。そして、2004年、建築バブルのように新しいビルが次々と建てられる東京で、古いビルを使った展覧会やイベントが企画され、たいへん好評であった。

六本木 芋洗坂に建つ7階建てのマンションを、5days-galleryにし、デザイナー、アーティスト、メーカーの展覧会場に生まれ変わらせた。1階では、昨年、名古屋芸大ですばらしい展覧会と、ワークショップをした深澤直人氏がダナーゼ(イタリア)の新作を発表。全てを取り払ったコンクリートの荒々しい空間に、彼の繊細なプロダクトデザインが展示され好評であった。これが終わると、新しいショップとSOHOにリノベーションされる。また、渋谷近くの旧池尻中学校には、10月1日、建築、家具、映像、写真などの作家が、各教室を制作の場にする、クリエイタービレッジがオープン。「イデー」の事務所や、ショップ、パン工房もあり、今の時代を感じさせてくれながら、時代の連続も感じられ、魅力的であった。表参道の同潤会のアパートが取り壊され、新しい建物が安藤忠雄氏によって建築中である。新建築と建築のリノベーションが、同じ「建築」という言葉で語られる時代になる。

デザイン学部デザイン学科 平田哲生

12→2005 2月 EXHIBITION SCHEDULE	
アート&デザインセンター 展覧会スケジュール	
後期留学生作品展	11月26日(金) ~ 12月 1日(水)
POLLEN —美しき旅行史—	12月 4日(土) ~ 12月 15日(水)
日本画作品展	12月 17日(金) ~ 12月 22日(水)
冬期休館	12月 23日(木) ~ 1月 10日(月)
造形科工芸選択コース作品展	1月 11日(火) ~ 1月 15日(土)
AFTER REMISEN#6 秋吉風人+徳重道朗展	1月 22日(土) ~ 2月 2日(水)

Open 12:00~18:00 (最終日は17:00まで) 日曜・祝祭日休館 【入場無料】どなたでもご覧いただけます。





1998年9月に江南市布袋町の酒蔵で開催された展覧会がきっかけとなり築70年以上と言われるこの日本家屋が、建物のオーナーをはじめ地元の方々の厚意でアーティスト達が維持・管理・運営するギャラリーへ改装された。1999年から2002年まで「art house 七福邸」として展覧会やイベントに活用されてきたが、2003年から「+Gallery」に生まれ変わり、現代美術の意欲的で実験的な発表の場として活動している。

**+Gallery プラスギャラリー**

483-8236 愛知県江南市布袋町南236  
Tel 0587-56-5547  
http://homepage3.nifty.com/plusgallery/



2002年に名鉄西春駅前にあった薬局を改装し、名古屋芸術大学と西春町の共同プロジェクトとして発足。デザインやアートによる社会、地域貢献の可能性を模索しながら活動している。常設のショップとギャラリースペースがあり、学内外のアーティストやデザイナーの作品発表の場として、様々なプロダクトの開発も提案している。また、駅前商店街や地域と深く関わったイベントを開催している。

**Joint Project N/N (エヌツー)**

481-0041 西春日井郡西春町大字九之坪北町61  
第23オーシャンプラザ1F  
Tel/Fax:0568-25-2705  
http://www5.ocn.ne.jp/n2online/



常滑には現在も大きな土管を焼いていた窯が残っており、ギャラリーや博物館にもなっているが、この工房もそうした建造物のひとつ。現在は大学の陶芸工房として学生の使用だけでなく、生涯学習、大学の公開講座会場として地域社会との接点となっている。内部は自由に見学でき、将来的にはレジデンス制作もできるよう準備を進めている。工房のある焼き物散歩道には他にも窯のあった建物がカフェやレストラン、雑貨店などになっており、週末などは多くの人々が訪れる観光スポットとなっている。

**名古屋芸術大学常滑工房**

479-0836 愛知県常滑市栄町2丁目53  
Tel 0569-35-0149  
http://www.nua.ac.jp/



もとは繊維会社の店舗/倉庫/住宅として使われていたビルを2002年にえびすビルとしてリノベーションされた。1~3階までをカフェ、ブックショップ、雑貨店が入り、4階の住居だった部分がギャラリーとなった。今までの現代美術の枠にとらわれない、ここから始めるSomething New (可能性)をテーマに企画展を展開し、積極的に新しいアーティストを紹介している。この地区は、名古屋の中心部にありながら使われていないビルがいくつかあり、ビルごとリノベーションされた好例として注目されている。現在エビスビルPart 3がオープン予定。

**エビス・アート・ラボ**

460-0003 名古屋市中区錦2-5-29 えびすビル4F  
Tel 052-203-8024  
http://www.matsuri.co.jp/top2.html

特集 Places for Art

## Rethink アートのちから

**空きスペースを再考する。**

欧米では空きスペースをアートスペースとして再活用し、その後街全体が活性化された例が多くあります。その価値に最初に気づいたのは他ならぬアーティストやクリエイターたちでした。日本でもここ数年新たなアートの活動・発信拠点として廃工場や倉庫、学校や病院、銀行など使われなくなった建物がアートスペースとして活用されてきています。ここでは、この地域の例をいくつか紹介したいと思います。規模の違いはありますが、街の埋もれていた財産に人々が気づき、新たなコミュニティが形成されつつあるように感じます。



西春町内にある築70年の「味噌蔵」。40年もの間、倉庫となっていたところを、アートプロジェクトの本拠地として再生させようという活動が始まった。2005年秋、本学と姉妹校提携を結ぶドイツ・ブレイメン芸術大学の学生を中心としたアーティストが来日し、味噌蔵を会場としたアーティストインレジデンスを行う。レジデンスでは、本学の学生・卒業生など日本からの参加アーティストも制作し、愛知県内でも展覧会を開催する予定である。現在は、毎週木曜日に味噌蔵でオープンミーティングを開き、プロジェクト全体の企画立案、出品者、また味噌蔵の再生活動にあたるボランティアなど広く参加者を募集している。

**味噌蔵の再生とアートプロジェクトブレイメン・名古屋アートプロジェクト2005**

今後のスケジュール、メンバー募集については、ブレイメン・名古屋アートプロジェクト2005実行委員会事務局まで。  
http://www1.odn.ne.jp/b.mayo/bremen\_nagoya/000index.html

現代アートがこの蔵から発信され、名芸大の卒業生や在校生により、継続して発表され、新しい西春の芸術を地域の方のみならず世界に発信する基地として活用して頂ければこんなに嬉しい事はありません。

### 立ち現れる空間—久野利博展

2004年9月16日~11月23日  
名古屋市美術館常設企画展/名古屋市

名古屋美術館では、春の「ナビゲーション(フライト) 庄司達」展に続いて、「立ち現れる空間—久野利博」展が開催されました。両者とも空間を巧みに生動させるものですが、前者が感覚への働きかけを純粋に追求したのに対し、今回の作品では記憶への働きかけも重要に思われました。今回の展示物の黒と褐色を基調にした全体の色あいや個々の展示要素のセレクションは弥生時代の人間の営みを思い起こさせるかもしれません。また、お供え物のように配された米や灰、全体の展示の清潔感がある種の儀式性を感じさせます。日本文化という花鳥風月が連想されますが、ここでは別種の文化の関係の網目とのテキスト交錯の関係が結ばれているのであり、そのことが戸惑いをほらみつつも懐かしさの印象をわれわれに与える理由のひとつかもしれません。一瞬のうちに鑑賞者に衝撃を与えるのではなく、米粒の盛られたお玉や台の脚の繰り返しのリズムが鑑賞者に時間の中でこの展示物を受け入れるようにと穏やかに対話を促しています。その意味では、全体の空間構成もさることながら、個々の鑑賞者の中でさまざまなイメージが去来し静かに像を結んでいく、そのための読まれるテキスト装置として久野氏の作品をとりあえることもできるのかもしれない。

美術学部 美術文化学科 栗田秀法

### 宇野亜喜良イラストレーション展

2004年10月8日~22日  
名古屋芸術大学/ギャラリーBE+X棟2Fラウンジ

1960年代よりアンギュラ劇団のポスターなどを手掛けたことで知られる宇野亜喜良氏は、時代に応じた活躍の場を広げながらイラストレーション・グラフィックデザイン・絵本・アニメーション・装丁デザインなどの多様な分野で活躍を続けています。大学内の2会場を使って開催された展覧会場では、出版された間もない2冊の絵本(江國香織文「ジャパン」、寺山修司文「上海異人娯館」)の原画をはじめ、これまでに氏が手掛けたポスターや出版物など多数の作品が展示され、会場は独特のモダンで幻想的な世界がつけられていました。宇野氏は今年度本学客員教授として会期中の10月14・15日のワークショップを開催し、16日には公開講義も行われました。

写真(左)が宇野亜喜良氏

## RELAY ESSAY

### 卓越された巧みの技

2004年8月にオリンピック発祥の地ギリシャで第28回夏季オリンピック競技大会が開催され、日本選手が大活躍し、私たちに多くの感動を与えてくれた。その躍動的な姿は記憶にまだ鮮明に残っている方も数多いのではないかと思います。古代オリンピックは、全能の神ゼウスをはじめとした多くの神々を崇拝するための神聖な祭典競技として誕生し、選手たちは祖国と自己の名譽をかけて競ったのである。選手たちは戦士として自己を鍛え抜く。その研ぎ澄まされた肉体と精神、卓越された巧みの技と躍動感はとても見事であり、競技中の場面一つ一つが芸術的価値を持っている。ミュロンの「円盤投げ」はまさにその象徴といえる。しかしこのことは単にオリンピック特有のものではなく、スポーツの持つ大きな特徴といえよう。

デザイン学部教養部助教授(健康科学)

### あなたは「人間」をどうつくる?

—『人間をつくってください』展報告—

2004年10月5日~17日  
名古屋市民ギャラリー矢田/名古屋市

「人間をつくってください」。この奇妙な依頼を受けたのは北山善夫・竹内孝和・森北伸・芝裕子の彫刻家四名。難題に呻吟した彼らは今年10月名古屋市民ギャラリー矢田で回答を披露した。感想は「素晴らしい」の一言。自然科学の専門家ではないのに、生き物としての人間をこんなに的確に捉え、魅力的な作品に仕上げる力はどこから湧出するのだろうか。芸術は凄い。

実はこの依頼の主「ハレチンさん」は架空の人物。彼は設楽知昭と高橋綾子作り上げた「作品」でもある。彼の問いかけは彫刻家四名だけでなく、展覧会の枠組みを超え、遠く離れた近畿の芸大生達をも刺激した。設楽は新作を描き、高橋は書籍を編んだ。芸術家ではないロボット学者の梅崎太造、心理学者の岡田猛、人類学者の私、の三名も改めて「人間」を考え直し、答えを高橋の本に執筆した。本の題名は「人間をつくってください」。展覧会終了後もハレチンさんは本の中から人々の創造力と好奇心を刺激し続けるにちがいない。「人間とは何なのだ?」「あなたなら人間をどう作る?」

美術学部 非常勤講師 茶谷薫

### 東京デザイナーズウィーク

2004年10月7日~11日  
東京都庁/都庁45階南展望室

東京デザイナーズウィークは、1997年に第1回が開催され、今年で第8回となります。2001年より学生による作品展が始まり、毎回テーマに添って制作された作品が展示されます。今年は国内40校、海外10校が参加しており、テーマは「ストリートファニチャー」。西新宿を変えるストリートデザインとして高層ビル街全体を会場として開催されました。本学からも10名がエントリーされました。津上香織のコンクリート打ちっぱなしのベンチには良く見ると芝が植えてあり、久保慶和の作品は舗道の植込みをイメージして制作されました。一見とても不安定に見える窪田翔一の作品には多くの観客が身体を預けていました。東京都庁45階にあるこの展望室には国内外から多くの観光客も訪れる場所ですが、高さ202メートルの展望を楽しんだ人々がふと不思議なデザインの椅子に気づき、座り心地を楽しんでいました。

### 菅嶋康浩

アテネオリンピックで男子ハンマー投げの金メダルを獲得した室伏広治選手の父でコーチの重信氏が現役引退の少し前、自己の日本記録を更新したところにつきのようなことを述べていた。“私はより優れた高度なわざを獲得しようとする場合、フォームや動作の美しさを追及しようとしている。美しさを求めることで、無駄のない完成されたわざを獲得できる。記録は、その結果として伴われるのである”。

美しさの追求、これは単に芸術家だけの言葉ではなく、技を極めようとしたとき、スポーツにおいても合い通ずる言葉なのである。

デザイン学部教養部助教授(健康科学)